

PICS (集中治療後症候群) について

Post Intensive Care Syndrome

コドモックルPICU (小児集中治療室) では外科手術後や重症感染症、循環器疾患など様々な患者様を対象に治療しています。近年、治療方法の進歩により死亡率は低下し、今までは救えなかった命を救えるようになってきています。その一方で、集中治療を受けた患者様が無事退院できても、同年代の健常な方に比べると生活上の困難を抱えていることが分かってきています。退院後の生活上の困難とは、身体機能の低下(疲れやすい、関節が固い、呼吸筋も含めた筋力が落ちているなど)、認知機能の低下(忘れやすい、情緒的に落ち着かない、学力が低いなど)、発達、メンタルヘルスの問題などです。これらの問題をPICS (集中治療後症候群) と呼んでいます。また患者様本人だけではなく、その家族にもメンタルヘルスの問題が生じていると言われてい

ます。また患者様本人だけではなく、その家族にもメンタルヘルスの問題が生じていると言われてい

PICSの対策で有効なのは、早期にリハビリテーションを開始することだと言われています。数年前までは、血圧や脈が変動することや、挿管チューブや血液透析のチューブなど大事なラインのトラブルを回避するために、重症な患者様のほとんどはリハビリを開始できず、大事なラインが不要になるくらい回復してから開始していました。しかし早期に開始することで、PICSを予防・治療でき、退院後の生活にも良い影響を及ぼすというメリットが注目され、医師や看護師、理学療法士などが一緒に介入することで、体を動かす苦痛や血圧・脈などの変動を最小限に抑え、大事なラインが身体に入ったままでも安全にリハビリを開始できるようになりました。リハビリと聞くと訓練のようなことを想像するかもしれませんが、特別なことでなく、PICUで治療を受けながらできるだけ日常生活に近づけるようにすることがリハビリだと考えています。例えば、人工呼吸器を使用している場合、ご家族に抱っこしてもらったり、自分で座って遊んだりできることを目標にリハビリを行っています。また発達の支援も同時に行います。

PICUで治療を受けることになった時に、普段どんな生活をしていたか、PICUの中でどんなことをしたいかをスタッフに教えていただければ、それを目標にリハビリを進めていくことも可能です。

看護師 田崎 信

理学療法士 金田 直樹



お子様が集中治療を受けたご家族の中には急性ストレス障害に悩む方も少なくないと言われていますが、お子さまのリハビリをご家族と一緒に行うことで、お子さま、ご家族の両者のメンタルヘルスにも良い効果があるので、面会にいらっしゃった際には一緒にリハビリを行っていただけると思っています

PICUでの治療は、治療を受けるお子さまにとって負担が大きいのはもちろん、多くの点滴ルートや人工呼吸器など様々な医療物品を使用していて驚くご家族もいらっしゃるかもしれませんが、できるだけいつもの生活に近づけるように、そして退院後の生活に困ることがないように、スタッフ一同取り組んでいます。

モックちゃん

コドモックルをゆく!



モックル号

わたし なまえ くるま
私の名前がついた車だよ!

ほか びょういん うつ
他の病院へ移ることになったお子様は、この「モックル号」で、スタッフ いっしょ あたら びょういん
と一緒に新しい病院へ。
準備 じゆんび お
が終わったら、
安全運転 あんぜんうんてん しゅっぱつ
で出発です。





Royal Children's Hospital Melbourne

訪問記

Royal Children's Hospital Melbourne



整形外科 藤田 裕樹
ふじた ひろき

このたび日本小児整形外科学会 2018 Iwamoto-Fujii Ambassadorとして2018年11月12日から30日までの期間Royal Children's Hospital Melbourne (RCHM)を訪問しましたのでここに報告します。

まずIwamoto-Fujii ambassadorとは、九州大学整形外科前教授である岩本幸英先生、佐賀整肢学園藤井敏男先生によって設立されたものであり、応募資格はいくつかありますが、何といたってもこのambassadorの魅力(人によってはそう思わないかもしれませんが)は、渡航先は自ら探し、その交渉も自らすることでした。最初のアプローチから1年弱かけて渡航に漕ぎつけました。

さて、出発は11月10日(土)でしたが、その前日の9日にまさかのメルボルンでのテロ事件があり、出発時はかなりビビってました。しかし、RCHMの周囲には成人対応のRoyal Hospitalそして広大なUniversity of Melbourneといった学術的な雰囲気を持ちつつ、かといってその周囲には広大なRoyal ParkとPrincess Parkがあり非常に魅力的な風景に癒されました。

RCHMの整形外科は卒後6-7年目の若手医師を含め約15名のスタッフで構成され、整形外科の年間手術は2000~3000件と到底うちが敵うわけのない大病院です。今回のambassadorは主に2人の先生によって話を進めていただきました。まず1人目はDirectorのDr. Michael Johnsonです。彼は脊椎手術の技術もさることながら、股関節脱臼の手術、脳性麻痺児の足の手術などこれぞスーパーマンという圧倒的な存在でした。また、御婦人が高校の日本語教師をしていることから大変な親日家であり、外来中は「おいお茶」のベッドボトルをよく飲んでいました。そしてもう1

人は、God of Pediatric OrthopaedicsであるProf. H. K. Grahamです。そもそもこのambassadorは、Grahamの元で学びたい!という強い思いから始まり、gait labのHPにあった彼のメールアドレスにダメ元で強い思いを綴ったメールを送ったことから始まりました。Gait analysisでの英文論文を持たない無名中の無名のこの自分の申し出に、快諾してくれたGrahamの紳士の態度、包容力の大きさ、若手医師への指導に際し非常に丁寧に説明する姿・・・全てに感銘を受けました!

さて前述のごとく訪問の目的は、Prof. Grahamを中心とした脳性麻痺の治療に対するオーストラリアの治療体系を見学及びカンファレンスに参加することでした。3週間濃厚なスケジュールを組んでいただき、かねてからの希望であったGait Labでのカンファでも有意義な意見交換をすることができました。またsupervisorであるDr. Paulo Selberが来春からUniversity of Columbia in NYCのDirector of Gait labに就任するため将来的な訪問を確約してきました。今でもメールでのやりとりをしています。

話は変わって、整形外科のトップである自分が3週間も病院を空けて良いのだろうか?という葛藤は常にありました。しかも海外に・・・自分が手術をした患児も病棟に残して行きました。このambassadorは多くの人のサポートがあって成立しています。續センター長以下全ての職員、特に不在を完璧にカバーしてくれた房川祐頼先生、山崎師長を中心とした医療病棟スタッフ、リハビリテーション課スタッフそして不在期間を承諾していただいた患児及びそのご両親・関係者に深く感謝申し



上げます。

最後に、この文章が届くことはありませんが、退官直前の多忙な時期にambassadorを快諾してくれたProf. H. K. Graham, RCHMのdirectorであるDr. Michael Johnson, supervisorでありGraham同様CP治療の権威であるDr. Paulo Selber, 内反足の治療について熱いdiscussionをしたDr. G. R. Natrass, 創外固定器治療及び骨形成不全症治療についてdiscussionをしたDr. Chriss Harris, Prof. Grahamがgait labでの検査及び評価を全て一任しかつ信頼しているPT. Pam Thomson・・・関わった全てのスタッフに感謝申し上げます。全く道の無いところから道が見えた喜び、渡豪の交渉に要した数カ月の苦勞と不安、それを補って余りあるRCHMスタッフの温かさに触れた3週間、ゆえにメルボルンを去るときは年甲斐も無く号泣してしまいました。生涯忘れ得ぬ財産を得ました。